「俳句にお茶会、カラオケに日本国憲法」
——授業報告：はじめての「日本事情B」——

野　村　美穂子

"*Haiku*, Tea Ceremony, *Karaoke*, and the Constitution of Japan, etc."
——Class Analysis of the New 'Current Issues in Japan B'——

Mihoko NOMURA

Abstract

The reorganization of the Faculty of International Studies in 2000 has greatly changed its curriculum. 'Current Issues in Japan B' was formerly an obligatory course only for foreign students who needed to know many aspects of Japan where they live, but now it is required also for 2nd-year Japanese students who are to take part in the Semester Study Abroad Program. We started the new 'Current Issues in Japan B' this spring semester for the first time. This paper reports on contents of the course and discusses some problems which we should solve in order to offer students more effective classes in the future.

1．はじめに

国際学部では、2000年度入学生より、改組に伴う新カリキュラムが適用されることとなった。この新カリキュラムでは、従来外国人留学生のみに対して開講されていた日本語等科目のうち「日本事情B」が日本人学生にも受講可能となり、とりわけ、2年次秋学期に短期留学を予定している学生（そのほとんどは、国際コミュニケーション学科多文化コミュニケーションコース所属）についてはこの「日本事情B」は必修科目とされた。

2．実施にあたっての問題点

日本人学生と外国人留学生が同じ教室で日本について議論するというのは、イメージとしては確かに限りなく美しいが、現実的には上記の変更に伴いさまざまな実施上の困難が生じた。

まずは学生数の大幅な増加である。留学生のみを対象に行う授業であれば、全体をまとめて1クラスとしても受講生はせいぜい20名ほどであるが、今回は2クラスに分けても各80名弱の人数となった。従来、留学生向けの授業では、人数が少ないということを生かし、日本語の練習の意味も含めて、毎回なるべく全員に何か発言させるように心がけていたが、これは80名規模のクラスではまず無理である。

また、留学予定の日本人と合同のクラスということで、授業内容も大きく変更せざるを得なくなった。「日本事情」はもともとは留学生のためのクラスである。したがって、従来は「日本事情」とは言いながらもどうしても「日本語」の要素が少なからず混入するものとなっていた。一方、新カリキュラムにおいて、日本の諸事情について改めて考えさせることを主目的として日本人の留学予定者にクラスを開放するとなると、内容的には、日本に関することの中で、日本人でありながら現代の若い学生の多くが①知らないこと②ふだん気にもとめないこと③知っていても深く考えたことがないこと④自分でやってみたことがないこと、について改めて注目するということがメインになり、「日本語」の細かい運用の適否は二の次ということになる。こういった方針の変更のため、今回は授業内容を一から見直すことになった。

以下、留学生と日本人学生両方のためのはじめての「日本事情B」2クラスのうち、筆者が担当したクラスについて、その七転八倒の試行錯誤の過程（？）を簡単に報告する。

3．授業報告

3－1．テキスト・内容・授業の進め方

筆者のクラスでは、まず初回に受講生へのアンケートを行った。質問内容は、海外経験の有無・秋学期の短期留学への参加予定の有無・英語能力に関する自己評価・日本の伝統文化（茶華道・日舞・邦楽等）について習った経験の有無、などである。このアンケート結果をもとに、第2回からは80名弱の学生を10グループに分けて授業を進めていった。

2クラス共通のテキストとして、あらかじめ平凡社の『日本を知る101章』を指定しておいたが、これは日本に関連する101の項目について専門家あるいはそのテーマに何らかの関係のある人が1ページほどの短い文を寄せたものの集成である。各項目1枚のカラー写真つきで、すべての文が次のページに英訳されている。筆者のクラスではこの中から58項目を指定し、毎回関連する2～4項目をひとつのグループに割り当て、その項目についてテキストをまとめたうえ、自分たちでほかにも資料を探して意見を発表するように決めた。授業は、基本的には、毎回まずその発表の後、全員での討論、筆者の補足という形で進めていった。選定した58項目とそのまとめ方は以下のとおりである。

1：芸者・富士山・桜・日の丸
2：琉球・アイヌ
3：団体旅行・受験戦争・制服
4：会社・満員電車・宴会
5：わいせつ・歌舞伎町
6：パチンコ・カラオケ・マンガ・ファミコン
7：歌舞伎・落語・能・文楽
8：和服・下駄・風呂敷
9：インスタントラーメン・鯨・すし
10：床の間・和洋折衷・畳・障子
11：和菓子・茶道
12：俳句・和歌
13：交番・自動販売機
14：お辞儀・愛想笑い
15：粋・わび／さび・あはれ
16：刺青・浮世絵・書・ひらがな
17：忠臣蔵・源氏物語
18：花火・盆栽・虫の音
19：お盆・神道・仏壇
20：日本国憲法・天皇
21：折り紙

この21回のうち、11回めの「茶道・和菓子」以外の全20回について、10グループに割り当てたので、

各グループが2回ずつ調査・発表の機会をもったことになる。「茶道・和菓子」の回については、受講生の中に茶道経験者（「数回やった」程度から「小学4年から高校にかけて習っていた」まで）が4名いるということが初回のアンケートの結果わかったので、道具類の購入から実際の手ほどきまでこの学生たちの手を借りた。

3－2．授業の実際

「日本事情B」の上記のプログラムの中には、「茶道・和菓子」と同様、「俳句・和歌」や「折り紙」のように、一部実践的な内容をもつものがある。現代の学生たちの多くは、理論的な話よりも実践的な話、何かの役に立つかどうかも知れず難しいだけの単なる頭の体操よりもとりあえず確実に利用できそうな内容を好むようであり、今回の「日本事情B」でも、これらの実践的な内容をもつ回は概ね好評であった。

「茶道・和菓子」に関しては、経験者である学生にまず模範を示してもらい、その後全10グループを5組に分けてそれぞれ茶道具一式とポット・抹茶・和菓子を配り、全員自分の手でお茶をたてて飲んでみるということを実際に行った。このいわば“お茶会”の開催前に尋ねてみたところ「これまでの人生で一度もお抹茶を飲んだことがない」「抹茶？　抹茶味のアイスクリームとかは好きだけど、本物は知らない」という学生がかなりの数に上ることが判明しており、そういう学生たちにとって、今回自分たちの手でお茶をたてて味わう機会をもったことは心に残ったようである。留学生の中には、お茶をたてるまでは面白がってやっていても「この匂いがダメ」と言って飲むことは拒否した学生もおり、また「あんこが甘すぎる」というように和菓子の味に馴染めない学生もいた。そのような留学生の生の反応に接することも日本人学生にとっては新鮮であったかもしれない。

また、「俳句・和歌」の関連では、実際に自分たちで俳句または短歌を最低一つ作らせ、さらに百人一首のトーナメントも行った。作らせた俳句・短歌については、後の回で鑑賞と人気投票も行ったが、最多得票の句は「サイダーの泡と一緒に消える夏」、次点は「甲子園快音響く炎天下」であった。俳句というよりは川柳のようなものも含め、「あと2kg．ビキニのためにダイエット」「雨ばかりもう限界だ服の着回し」など、多彩な作品が並び、学生が楽しんで作っているのがよくわかった。興味深いことに、全体的に見ると国際関係学科の学生よりも国際コミュニケーション学科の学生の方に感性豊かな作品が多く、また男子学生の句歌よりも女子学生の句歌の方が評価が高かった。百人一首トーナメントについては後日談もある。最終回に学生たちに書かせた授業全体の感想の中に「百人一首大会の日に熱が出て欠席してしまい残念でした。実は私は百人一首は得意なのですよ！」というコメントがあった。人間は何か得意なことや特に関心のあることにはやる気を見せるものだというごく当たり前のことが改めてわかる一文である。

「折り紙」の回でも全員に実践させたが、“男女の違い”的なものはここでもはっきり出た。最低限折り鶴くらいは折ってみるようにという課題を出し、折り方の図まで渡したにもかかわらず、男子学生の苦心惨憺ぶりは驚くほどであり、対照的に女子学生には図も見ずにきれいに折り上げる者が少なくなかった。日本では幼児教育段階で男女別の指導がなされているのであろうか。それとも性別による天性の違いであろうか（「和服・下駄・風呂敷」の回では実際に風呂敷でさまざまなものを包んでみたが、このときも男子学生よりは女子学生の方が器用さを見せた）。また、ここで目立ったのは、折り方がわからないなら周囲の“わかっている”人間に尋ねればよいのに、そのコミュニケーションのとり方が下手な学生が数名いたことである。

以上は、一種“お遊び”的要素も含む実践優位の回であるが、もちろんそういった授業ばかりではない。多くの回は、担当グループが手分けして調べ、レジュメを作り、他の受講生の前で発表し、そ

の後教壇を離れる許可（？）を筆者が与えるまで質疑応答・討論の司会を務め、最後に筆者が問題提起や補足説明を行う、というきわめて地味な、ごくふつうの授業であった。こういった授業においてはいくつかの問題点が明らかになった。まず、これはこの数年にわかに感じられるようになってきたことであるが、「調べてきて発表しなさい」という課題を出すと、確かに学生は調べてきて発表するものの、その中身が問題なのである。学生は非常にしばしば、インターネット上の関連のサイトをプリントアウトしてきて、それを何の加工もせずそのままレジュメとしたり、また口頭発表の際にそのプリントアウトの中にある文章をそのまま棒読みしたり（しかも往々にして読み方を間違える！）するのである。内容を自分たちなりに消化して聞き手にわかりやすく説明しようという努力があまり見られない。次に、素直な彼らはそういった資料に書いてある文章の内容をそのまま正しいと思い込み、疑ってみることをしない。「刺青・浮世絵・書・ひらがな」の回で、「刺青」について発表担当者がネット上のサイトの説明文からそのまま「一昔前と違い、この頃は刺青は世間的な抵抗感も薄れてきて、特に若者はみんなふつうに施している」と述べ、聞き手の学生たちもその件については特に疑問を抱かないようであったので、あえて筆者は「そうなんですか。ではみんなの中で、別に本当に彫ったものでなくても、シールでも何でも、とにかく何か刺青をやっている人、手を挙げて！」と突っ込んでみた。挙手は１名もなかった（かくのごとく文教大学の学生はきわめてフツウでありマトモである。唯一の例外がその日このテーマのためにわざわざ胸元にタトゥー・シールを貼ってきた筆者であり、発表者が学生全体とこちらを順に見て「……うーん、先生だけですね」と言ったのには笑えた）。結局、「これだけたくさん若者がいるのに、誰も刺青なんかしてないみたいじゃない？　書いてあることをそのまま鵜呑みにするんじゃなくて、自分の頭で考えて、疑わしいところは検証してから発表しなさい」と受講生全体に“お説教”するはめになった。このように発表のしかたの問題のほかに、討論の段階での問題も大きい。討論の場ではたいていの学生はなかなか積極性を見せない。中に数名、テーマにかかわらずこちらが指名しなくともいろいろと発言するタイプの学生がいたが、指名しない限り何も言わず、指名されてからその件について考えるという方が大勢を占めた。多くの人の前で自分の意見を言ったりするのが恥ずかしいのかもしれないが、総じて、勉強／学問に必須の自主性という点では２年生はまだまだ発展途上であると言えよう。

実践が関係しない地味な授業の中でも、発表を担当しているかどうかにかかわらず学生が全体に比較的高い興味を示したのは、筆者が何か“見せる”資料を用意していく場合である。例えば「パチンコ・カラオケ・マンガ・ファミコン」の回では、特に「マンガ」に関して、筆者は、ただ単に何となく読むという日頃の接し方を越えてその構成の文法や分析のしかたにも興味をもってもらいたかったため、夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか』を適宜抜粋、コピーして資料として用いた。これはNHK人間大学（1997年）のテキストであり、豊富な例を用いて体系的に論じてあるため、漫画のあり方やその構成、日本の漫画の特徴などについてこれまで全く考えたことのない人間にも比較的面白くわかりやすい。また、「歌舞伎・落語・能・文楽」の回では、（筆者の全くの個人的趣味を反映して）歌舞伎役者中村吉右衛門がTVのトーク番組に出演した際の録画、ならびに、落語「垂乳根」の録音テープを授業中に流し、特に歌舞伎関係については手持ちの関連雑誌や公演のプログラムなども実際に回覧した。落語「垂乳根」はいわゆる前座噺と呼ばれる類の短いものであり、一席全体を聞かせて授業終了後にその筋とオチを記入・提出させたが、キーワードについてあらかじめ解説しておいたにもかかわらずオチを正しく理解していた学生は皆無であり、筆者もこれには少々ショックを受けた。「忠臣蔵・源氏物語」の回では、『源氏物語』原文の一部とそのいくつかの現代語訳・英語訳などを比較させたほか、全帖を漫画化した大和和紀『あさきゆめみし』からちょうど「桐壺」にあたる部分を

コピーして読ませ、自由に感想を書かせた。原文については高校の古文の授業で触れたことのある学生も多かったが、非常に部分的な接し方であり、またきちんと理解しないまま敬語法などの古典文法をうるさく勉強させられたため、それ以来否定的な感情を抱いている学生も少なくない。面白かったのは、学生の感想の中に、男女を問わず「女はコワイと思った」という意見が多かったことである。これには原作者の紫式部もあの世で苦笑しているに違いない。『あさきゆめみし』という漫画自体の存在については知っている者も知らない者もあったが、今回はじめて知った学生には「この時代の人たちも今の日本人と感じ方は似たようなものだということがはじめてわかった。早く知っていればよかった」という感想が見られた。

担当グループの発表後に行う討論について言えば、全回を通じてクラス全体が最も盛り上がったのが「日本国憲法・天皇」の回である。ここでは「俳句・和歌」の回と異なり、全体的に見ると、国際コミュニケーション学科の学生よりも、相対的に人数の少ない国際関係学科の学生たちが積極的なところを見せた（残念ながら国際コミュニケーション学科の学生には「憲法のことなどあまり深く考えたことがない」という者も多かった)。この回の発表担当者は日頃から授業に積極的に参加するタイプの学生であるが、特に憲法や軍備についてどちらかと言うと右寄りの意見を発表中かなり強く主張した（「必要とあれば核軍備も辞さず」というのが発表者の主張であった）ため、議論の時間になると、ふだんなら決して発言しないような大人しい女子学生や、当然のことながら留学生の一部も、指名を待たずに積極的に手を挙げて自分の意見を言い始めるという、他の回に類を見ない展開になった。ついに時間切れとなって筆者が自分の考えを述べる余裕がなくなり、次回にまわしたほどである。正直なところ、このような件に関しては“最サヨク”（≠“最左翼”）を自認する筆者は、これほど“タカ派”的な意見が出るとは予想していなかったため、ずいぶん驚きもしたし、ある意味で将来の社会に対していささか危惧の念を抱かされた（話は少々逸れるが、その後のテロ事件の発生ならびにそれに続く各国の対応で筆者がすぐに連想したのがこのような若者の考え方であり、このときの発表者の意見に代表されるような論理が続けばいずれ再び世界戦争は避けられないように思えてきて、何やら暗澹たる気分になった）わけで、次の回の冒頭では、核兵器の構造やその性能に関する簡単な説明をも含む被爆者の文集などを資料として提示したうえで、筆者自身の考えを述べることになった。いずれにしても、授業も最終段階に至ったところでこのように活発な討論ができたことは喜ばしいことである。この問題は考える意味が大きいと思われたため、各自の意見を提出することを課題にもしたが、その場で何も発言しなかった学生も改めて考えてみたらしく、さまざまな意見があって興味深かった。逆に残念でもあり情けなく思いもしたのは、筆者が自分の意見を述べた授業の後で、研究室にわざわざ訪ねてきた当初の発表担当者の口から「先生、あのー……、先生と意見が違うからといって単位を落とされたりしませんよね？」ということばを聞いたことである。もちろん筆者にはそのようなつもりは全くなかったが、もし学生の間にそういう感じ方が蔓延していてそのために自由に意見を発表する気になれないとしたら、これはいささか問題であろう。

さて、上記21回の授業の後の最終回は、ふだん日本語教育を行っている筆者が担当し、途中留学生の意見などもまじえながら、日本語と他のいろいろな外国語との違いは何か・日本人が日本語教育を行う場合の問題点は何か・日本で日本語教育を行う場合と外国で日本語教育を行う場合の違いは何か・初歩の日本語教育ではどのようなことを行うか、などということについて概説した。資料としては、英語を媒介言語とする日本語教育のテキストのコピーなどを用いた。短期留学中簡単な日本語を教える機会にでも役に立てばよいと思うが、いかんせんこの程度では心許ないということも事実である。

3－3．全回終了後の学生たちの感想

最も多かった感想は「この授業に出てみて、自分が日本のことについてどれほど知らないかということがよくわかった」というものであり、中には「こんな自分が本当に日本人と言えるのか……と思って自信がなくなった」というのもあった。こういうことこそ留学生教育担当としての筆者が常日頃毎日のように感じていることであり、これを出発点として彼らがふだん当然と思っていることや知っているつもりでいることを改めて見直す気持ちになってくれればこちらとしても嬉しい限りである。そのほかに、「実践的な授業で面白かった」「少なくとも自分のグループが発表したテーマについては理解できるようになったし、さらに興味が出てきた」「自分の日本語の力がいかに足りないかがよくわかった」「もっと人数が少なければよかった。人数が多いと自分の意見を発言しにくい」「留学生と親しくなれて、いろいろな話ができたのがよかった」などいろいろな感想があったが、概ねこの授業の存在自体には肯定的な意見が多かった。1名だけ「学生中心の授業なので正直に言ってあまり面白くなかった」という勇敢な（？）感想があったが、この書き手は筆者の知る限り遅刻・欠席の常習者であり、グループのほかのメンバーともあまり親しくなっていなかったようである。ただ、確かに、慣れない学生たちの発表はしばしば単調なものになり、そのためもあって発表中、聞き手側の中でそのテーマに今一つ関心が薄い学生たちによる私語が相当耳障りなことがあったし、また実践的な授業の場合にはどうしても“静粛に講義に耳を傾ける”というわけにはいかない。授業の進め方にはもうひと工夫もふた工夫も必要ということであろう。

4．授業担当者としての感想

はじめての「日本事情B」は以上のように終わったわけであるが、改めて振り返ると、この授業の大きな特徴は、その“日替わりメニュー”性の強さである。“日本”という大きな柱があるとは言え、大昔のことから現代の最新事情まで、また伝統文化の実践から現在の日本社会を支える法についてまで、非常に幅広い分野を扱うことになり、そのため毎回テーマがめまぐるしく変わった。移り気な学生の関心を引き続けるにはある程度効果があったかもしれないが、当然のことながら個々のテーマについて十分に検討しつくせたとは言えない。過去の蓄積も何もないはじめての授業でありしかもテーマが多岐にわたっているということで、担当教員としても少なからざる努力を必要とした。筆者は、もともと言語関係の問題だけは自分の専門と言えるが、それ以外の分野に関しては何のスペシャリストでもない。毎回変わるテーマを追って、図書館の本やインターネット、手持ちの資料など、思いつくもので手に入るものは何でも用い、いわば自転車操業で何とか“教えるべき内容”を用意したのが現実である。週に2回の授業の前日については、その日の授業のために午前中から出校していながら夜11時前に帰途についた回数は数えるほどしかない。全回終了時の学生の感想の中に「先生の博識には驚きました」という類の意見がいくつかあって、読みながら思わず噴き出したが、この春学期の間受講生の誰よりもよく勉強した（？）のは確かに間違いなく筆者である。

5．今後の課題

最後に、「日本事情B」に関して今後の課題と思われることを以下にいくつかあげておく。

留学予定者の必修ということで確実にある程度の受講者数が予想されたため、1クラスでなく2クラス設けたこと自体は間違ってはいなかったが、実施してみた結果から言えば、実践的な授業の場合

についても、また発表後の議論のしやすさという点から見ても、理想的にはもう少し小さいクラスの方が進行しやすいと思われる。これは学生の「人数が多すぎて発言しにくかった」という感想でも明らかである。時間割編成等を考えるとまず無理であろうが、将来的に機会があれば、せめて50名規模のクラスにできないだろうか。

また、先にも述べたとおり科目の性質上内容が非常に幅広くなるため、1クラスの授業全体をひとりで担当するのははっきり言って相当荷が重い。さらに言えば、日本に関連すること全体を扱う科目であるのに、なぜその担当者がよりによって言語教育の者なのかという根本的な疑問もなくはない。今回、筆者のクラスでは、成績評価の基準として、出席状況と授業中に随時課した宿題の提出率のほかに期末レポートを設定した。ほとんど自分の専門と関係のないことに苦労して半年間つき合って(!?)きたのだからということで、最後くらいは専門分野に合わせた好き勝手をさせてもらうことにし、「日本語の生の会話を10分間録音し、そのうち3分間ほどを書き起こしてみて、その内容の分析およびこの課題を実施した感想を述べよ」という課題を出してみた。提出されたレポートのできについては、その気があるのなら言語学専攻への進学をすすめたいと思うようなものから「何だこりゃ!?」というようなものまでいろいろあったが、課題を出された学生の側にしてみれば「何でこれが日本事情の課題なんだろう?」という感じもしたかもしれない。いずれにせよ、今回一応確固とした目的があって一部必修にした科目であるからには受講生の間でできるだけ不平等が起きないようにと考え、2クラスを設けるにあたっても使用テキストだけは共通のものにしたが、現在のままでは授業がかなり“属人的”なものになるのは避けられないと思われる。

さらにつけ加えると、この授業で期待される点のひとつは、日本人学生と留学生の意見交換である。しかし、特に今年度の場合、国際学部では対象となる2年生に留学生が非常に少なかったため、一部の日本人学生は彼らとかなり親しくなったかもしれないが、そうでない学生も大勢いたものと思われるし、また、数少ない留学生の側からすれば、事あるごとに指名されて質問されたり意見を求められたりするのは負担の大きいことであったろうと思う。過去の例から言って、留学生が毎年何人入学してくるかはとても予想できるものではなく、この点については、今後特にクラスサイズの縮小が可能になった場合などのことも考えて、さらに多方面で検討・努力していく必要があると言える。

6. おわりに

以上、今年度がはじめての試みであった新しい「日本事情B」の授業について、担当者として簡単にまとめてみたが、実際にはまさに担当者であるがゆえに知り得ないことも数多くあるはずである。今後この科目を実り多いものにしていくために、学生たちのカゲのぼやき声をも含め、お気付きの点をどんどん御指摘下されば幸いに思う。